

金井東裏遺跡 3 号祭祀遺構の再検討

杉 山 秀 宏

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 金井東裏遺跡の位置と交通路

2. 3号祭祀遺構の遺跡における位置

3. 3号祭祀遺構の形成過程

4. 3号祭祀遺構の特徴(杯について)

おわりに

— 要 旨 —

金井東裏遺跡 3 号祭祀遺構の再検討を行う。3 号祭祀遺構は、祭儀を別の場所で行った後に、その祭儀で使用した祭具を納めた遺構である。既に報告書で報告したものであるが、今回その遺構の重要性から再度、金井東裏遺跡と 3 号祭祀遺構について以下の 3 点について検討を加えた。

- ① 金井東裏遺跡が立地する位置について
- ② 3 号祭祀遺構のムラの中での位置について
- ③ 3 号祭祀遺構の設置から祭具を納める経過について

以上の 3 点の検討の結果、以下のことが分かった。

- ① 3 号祭祀遺構を有する金井東裏遺跡は、関東平野から信濃や越後と吾妻川沿いに往来する道沿いにある。特に吾妻川から関東平野への出入口に位置することで、信濃や越後との往来に際しての交通路の拠点となる。
- ② 3 号祭祀遺構は、ムラの中では、用水路や幹道のすぐ北側に設置されている。また、すぐ北側にある屋敷地内の 1 号掘立柱建物でのベンガラ素材の製作、42号竪穴建物内でのベンガラで塗彩した編み物製作など祭儀に係る作業を行っていたことが想定され、すぐ南の 20号竪穴建物は 3 号祭祀遺構の形成直前まで使用され、土器などもそのまま置かれている可能性が高く、祭儀に係る竪穴建物の可能性が考えられる。3 号祭祀遺構は、ムラの中では用水路・幹道の近くにあり、祭儀に係る諸施設の近くに設置され、重要な位置にある。
- ③ 祭具埋納の過程の想定は報告書製作時より多少変更と追加があった。囲いの設置前から設置後の白玉の散布状況が分かった。また、囲いの入口付近の東側に大型土器群を南北に入口に向かい一直線に配列し、西側に 1 号盛土状遺構を設け、北東側 3 号祭祀遺構の入口と推定される地点近くに粒状礫を大量に撒いていることが認められた。この後、大型土器を南に向かうコの字形に配置し、囲まれた中央部限られた空間に、膨大な祭具(鏡・玉類・ガラス玉類・石製模造品・鉄製品)を納めていく。飲食に伴って使用した杯・高坏・小型甕などの土器計 620 個以上を 2 ～ 20 段まで積み上げて片付け、さらに、祭具を埋納した地面上には、杯を中心に祭具を土器の中に納めたままの状態ですぐから 6 段ほどに積み上げて配置している。この段階で、火山灰が降下した。その後、数点の土器や鉄器などが持ち込まれていたことが、土層観察から明らかとなった。火山灰降下後もあきらめずに、祭儀で使用した祭具を納めていたことが分るのである。また、杯のうち、須恵器模倣杯を他遺跡に比べて多く製作使用していたことが想定された。

キーワード

対象時代 古墳時代

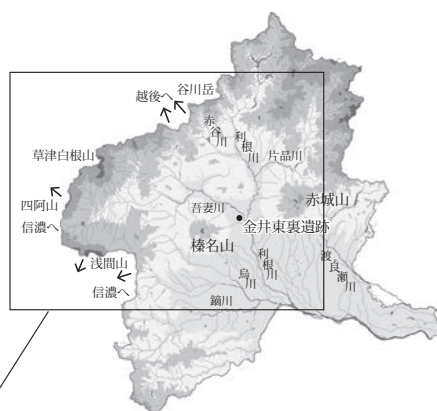
対象地域 群馬県

研究対象 祭祀遺構・祭具

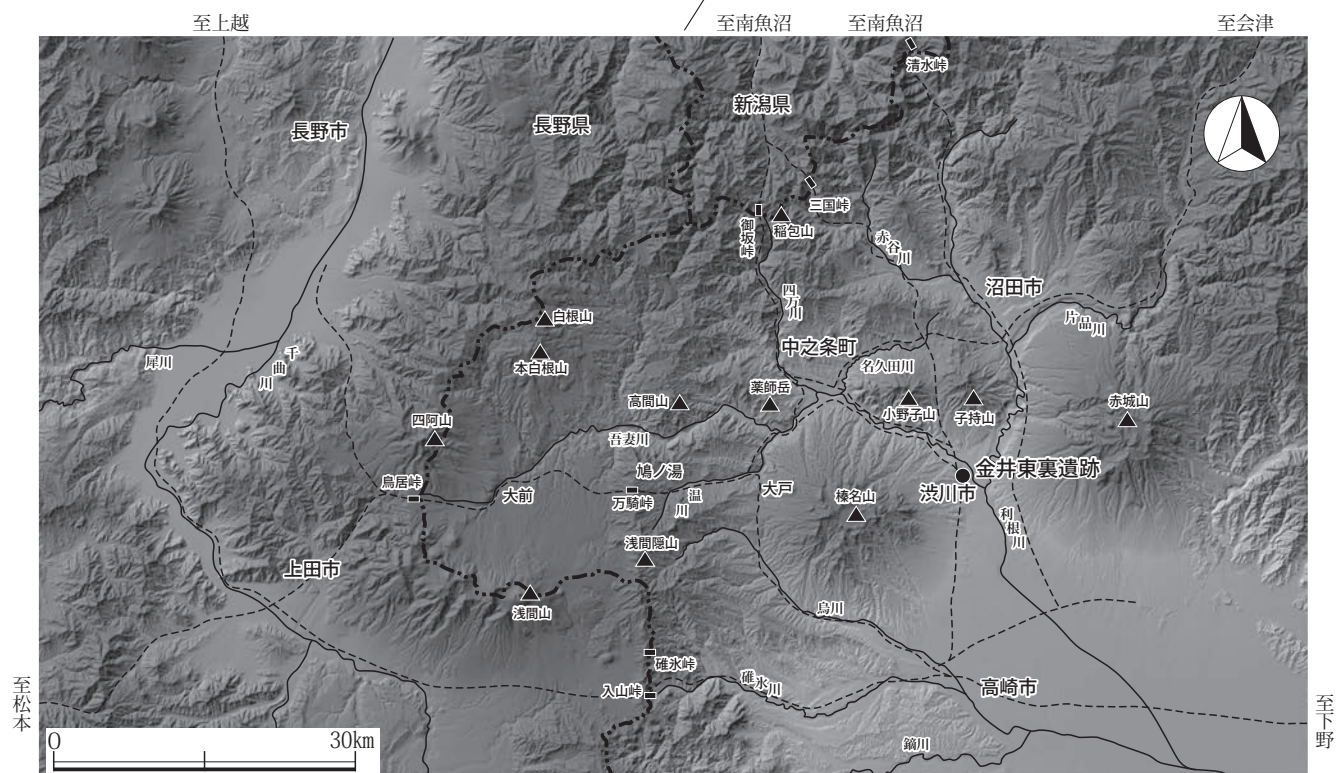
以下、金井東裏遺跡の位置、3号祭祀遺構のムラでの位置、3号祭祀遺構の設定からその遺構が完結するまでの流れについて再検討した結果を記す。

金井東裏遺跡は、群馬県渋川市金井に位置する。関東平野の基点に位置づけられるものである(第1図)。利根川と吾妻川が合流する地点の北西方向にあり、吾妻川右岸(南岸)の河岸段丘上にある。この地は、榛名山東麓沿いを北上してくると、吾妻川にぶつかる地点である。遺跡から、吾妻川沿いに右岸(南岸)を西に向かうルートがある。このルートはさらに榛名山北麓を西進し、金井廃寺などを過ぎて新井遺跡から温川に突き当たる。ここで温川を渡り四戸の古墳群の箇所を南下し、大戸から西に折れて温川沿いに西進し、万騎峠を越えて大前に至り、鳥居峠を越えて南下して上田か、北上して長野に至る信

濃へ向かうルートとなる。又、吾妻川に温川が合流する前に吾妻川を渡り、原町から四万川を北上して四万御坂峠を越えて南魚沼に向かう越後へのルートにもなる。つまり、信濃と越後との吾妻川沿いの往来のルートになる。また、金井東裏遺跡から、吾妻川を渡り左岸(北岸)を西に進み、中之条町伊勢町遺跡群を過ぎて、四万川沿いに北上し、四万御坂峠越から越後に向かうルートもある。さらに、三国街道と同じように吾妻川を渡り、子持山・小野子山の間を北上し、月夜野から新治へ向かい三国峠を越えるルートもある。以上、越後や信濃との往来のルートにおいて外せない地点であり、当時の交通路の要衝に金井東裏遺跡があったことは確かである。交通路の拠点



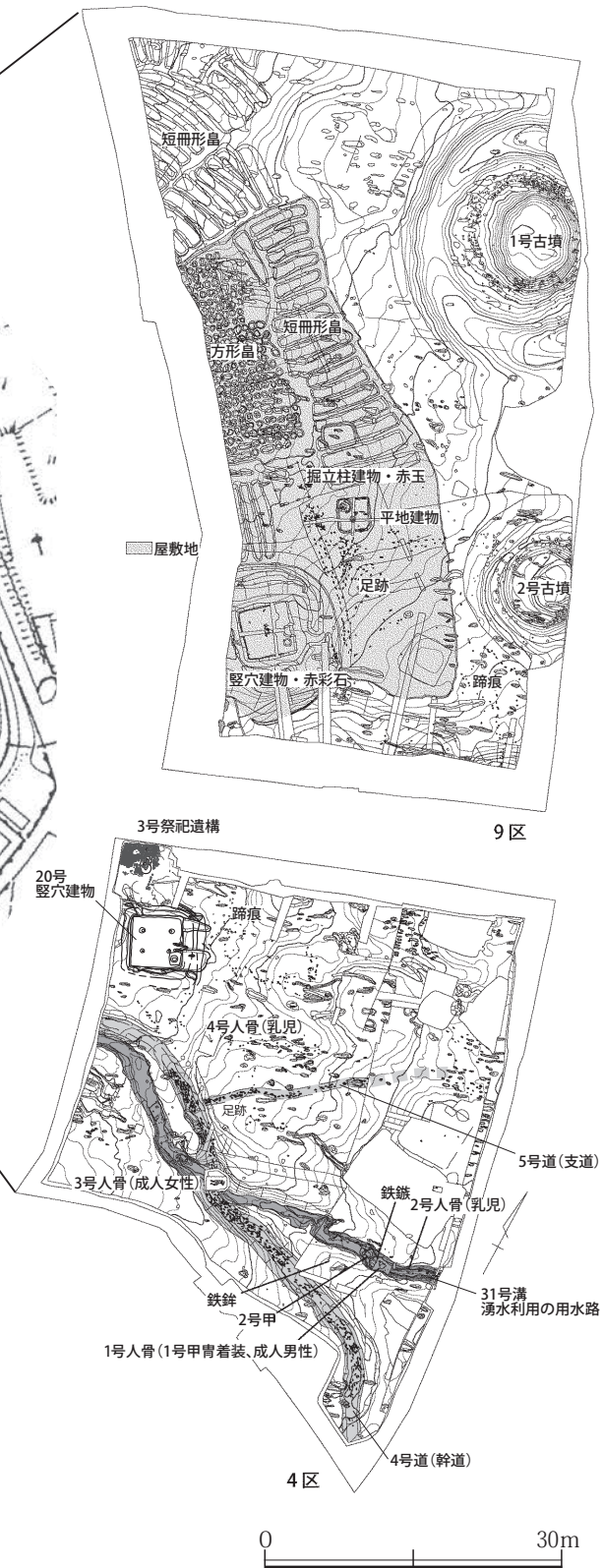
第1図 群馬県地形図



第2図 吾妻地域色別標高図及び古墳時代想定道図



第3図 金井東裏遺跡遺構図



第4図 金井東裏4・9区遺構平面図

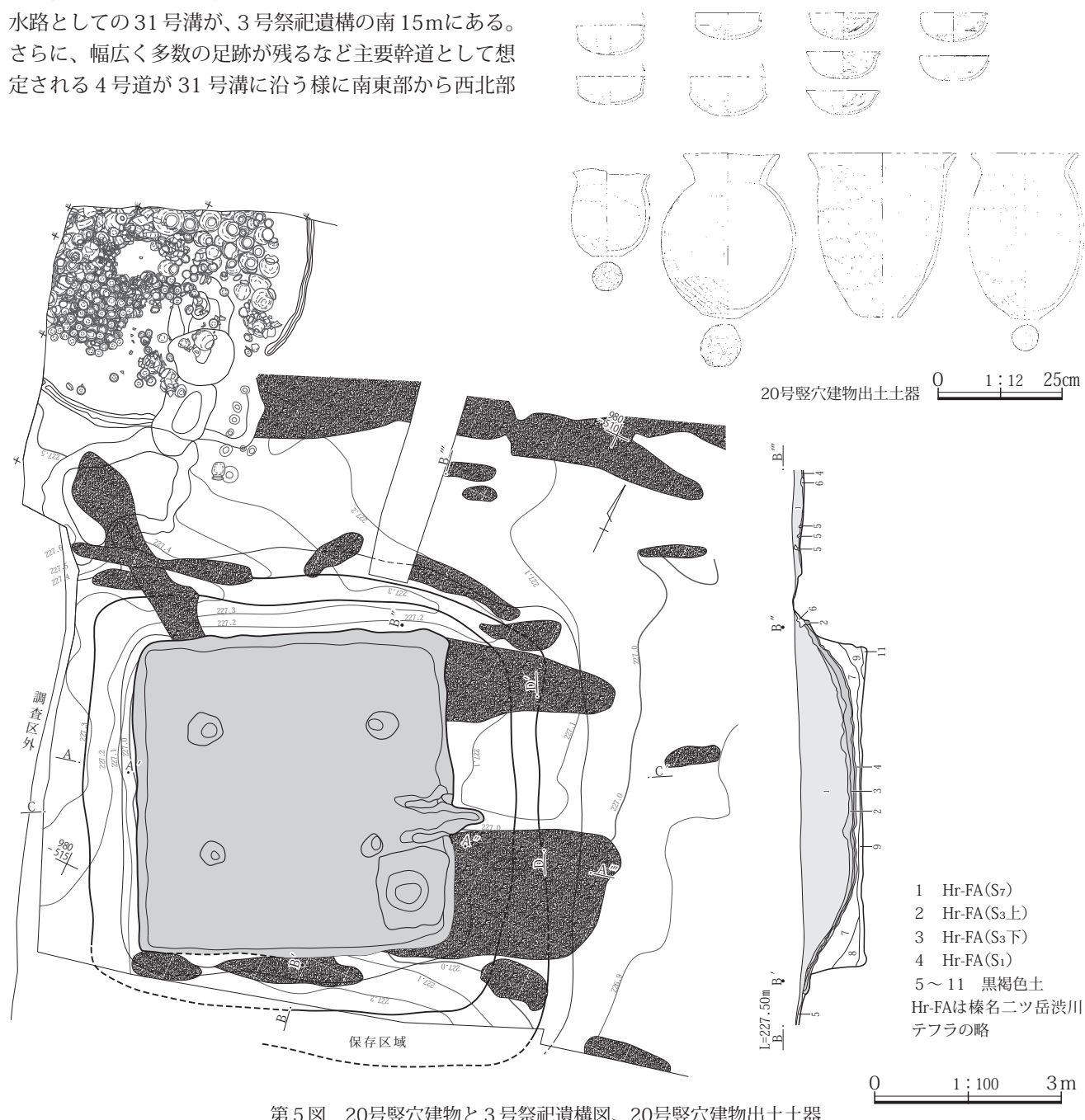
で、馬飼育や鉄器生産などの生産活動を行ったのが金井東裏及びその南に位置する金井下新田の両遺跡となる。

2. 3号祭祀遺構のムラにおける位置(第3～5図)

3号祭祀遺構は、第3図にあるように、遺跡地の中で20mの比高差のある河岸段丘の崖線から西に70mの位置にある。後述するようにムラの主要幹道で崖下の段丘に下ると想定される4号道があり、段丘下との繋がりが想定される地点でもある。また第4図にあるように、遺跡の居住域としては北端と推定される屋敷地のすぐ南15mに位置している。屋敷地は3号祭祀遺構から0.5～1mほどの比高差のある段差上にある。さらに、甲を着た古墳人や首飾りの古墳人が倒れていた湧水利用の用水路としての31号溝が、3号祭祀遺構の南15mにある。さらに、幅広く多数の足跡が残るなど主要幹道として想定される4号道が31号溝に沿う様に南東部から西北部

に向けて北上して、31号溝と交差した後に溝の北側沿いに溝に沿う様にして3号祭祀遺構の近くを通っている。このように、3号祭祀遺構の位置は、屋敷地のすぐ南側にあり、ムラにとって重要な湧水による用水路とそれに沿う様にして造られたムラの主要幹道のすぐ北にあり枢要な位置に設置している。

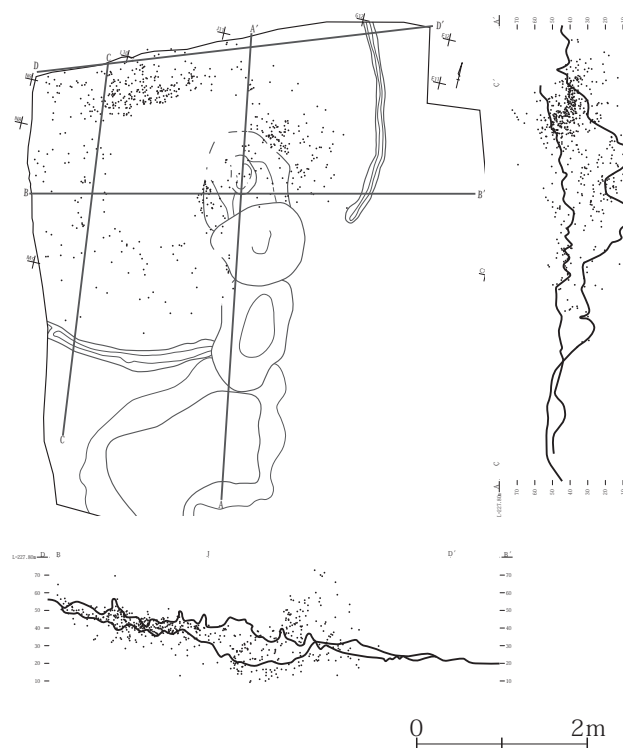
また、3号祭祀遺構の北側の屋敷地内では、1号掘立柱建物の床面に、120個以上の赤玉がおそらく乾燥させるために3段に積み上げられている。赤玉はベンガラ素材と推定する。また42号竪穴建物の床面には50個以上のベンガラを塗布した赤玉が置かれていた。おそ



第5図 20号竪穴建物と3号祭祀遺構図、20号竪穴建物出土土器



第6図 囲い外側白玉分布図



第7図 囲い内側白玉分布図

らく、経糸にベンガラを塗布して編み物を製作するさいの編み石と推定できる。つまり、屋敷地にある建物施設からは、祭儀に関係する可能性が高いベンガラに関するものが多数出土しており、火山灰降下前に、大量のベンガラ素材やベンガラ塗布の編み物製作などの祭儀に関係する行為を3号祭祀遺構北側の屋敷地で行っていたことが想定されるのである。以上のことから祭具埋納遺構としての3号祭祀遺構がこの場所に設置されたことの意味合いを考えさせるものである。

さらに、3号祭祀遺構のすぐ南側3mの所に20号竪穴建物がある。この20号竪穴建物は土器の様相からすると3号祭祀遺構とほぼ同じもの(第5図土器図)であり、時期差はほぼ無い。20号竪穴建物以外の周囲の竪穴建物はほぼ完全に埋没した状況にあり数年以上の差異がありそうだが、20号竪穴建物は、祭祀遺構と極めて近い時期での建物である。カマド袖脇には鹿骨小片が多数出土し、甕が3個カマドにかけられたままにあり、遺跡内では珍しい甕がカマド周辺から3個、甕が6個以上出土するなど、多量の土器の遺存の在り方は他の埋没建物で見ることができない。焼失建物ではないのに、使用した土器をそのまま置いていった可能性もあるこの建物の性格が、祭儀に関係するものである可能性が考えられる。20号竪穴建物の上屋を外し、廃棄されて周堤の土などが壁際から三角堆積し、床面中央に5cmほど堆積し、カマドにかけたままの甕の口縁が少し見えるまで埋まった時期に、火山灰が降下している(第5図)。火山

灰降下直前に行ったことが分かる3号祭祀遺構の祭祀に使用した土器の集積と祭具の埋納行為は、上屋を外した20号竪穴建物が、土にある程度埋もれている段階で、建物のすぐ北側で行われているのである。そのように見ると、祭儀に関係する可能性のある建物が南北に位置する箇所に、祭具の埋納遺構を設置したことに意味があると思われる。

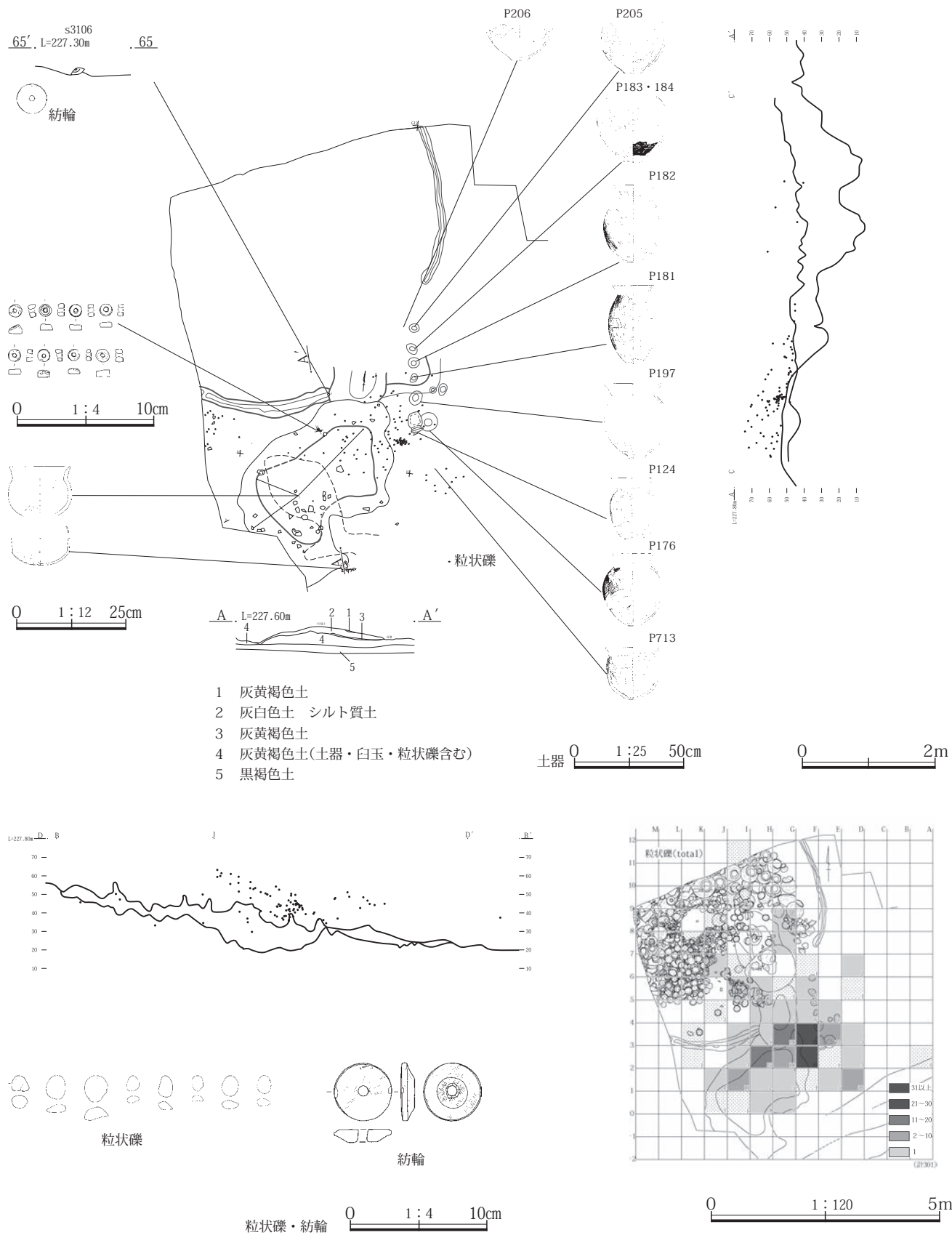
3. 3号祭祀遺構の形成過程

3号祭祀遺構の祭具の設置・埋納の形成過程について報告書記載時から再検討したものを中心にして以下再度記述する。

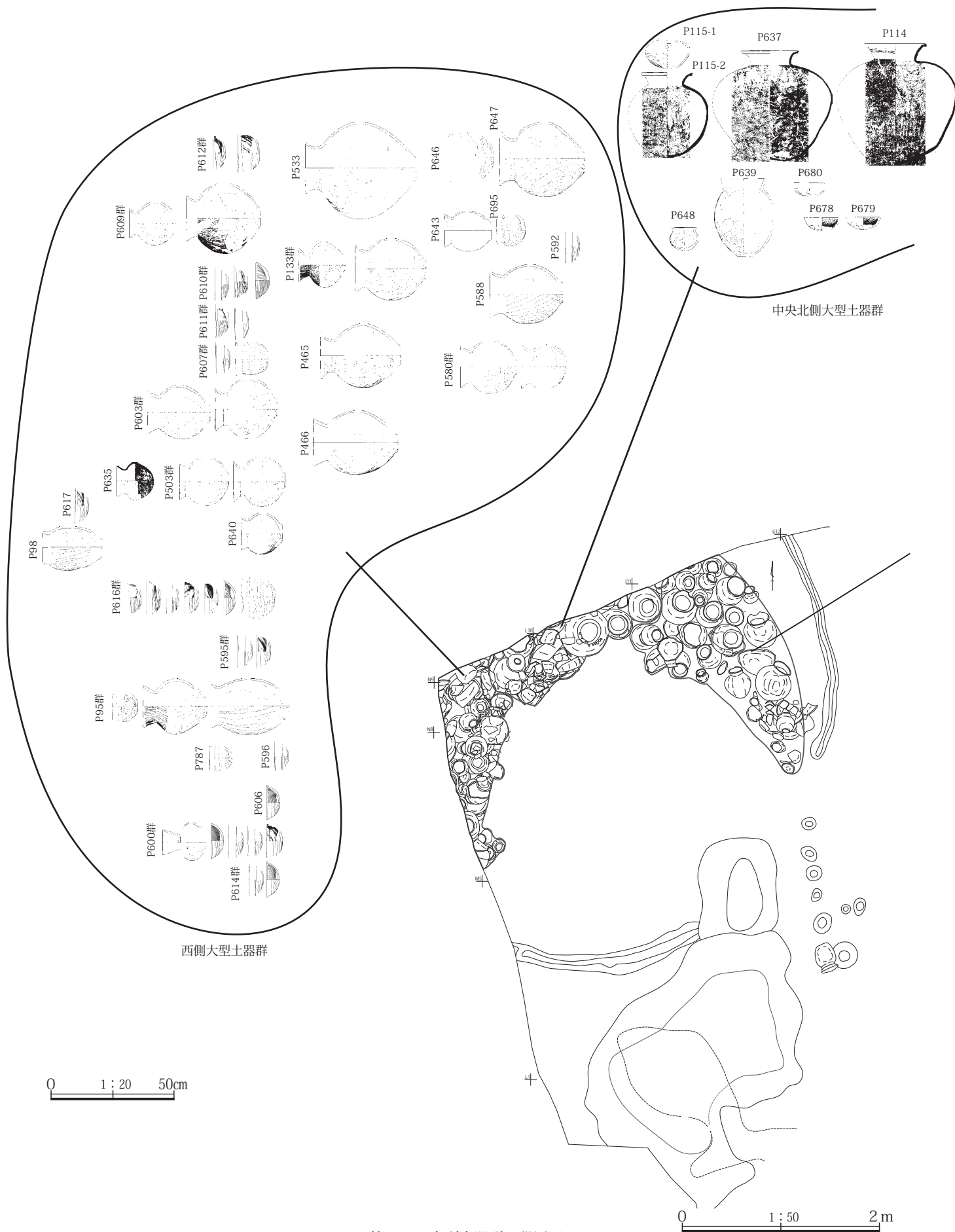
① 設置準備(第6・7図)

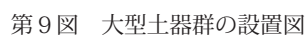
囲い設置予定地外部への白玉散布は第6図にあるように、火砕流で上方に位置するものを除き、全体的に地表面から数cm下から出土している。祭具に使用した土器及び祭具の集積・埋納場所を設置するにあたり、その地周辺も含めた全体に土を掘り起こして白玉を散布している(第6・7図)。これから埋納行為を行う場所に対して白玉散布を行うことで清めの行為を行っていると推定する。囲い設置予定地内部にも白玉を散布しているが、大型土器群設置前の白玉散布との区別はつかない。

これらの白玉群の上に囲いの基底を構成する溝が形成されることから、白玉散布の次に囲いが設置されたことが分かる。囲いについては、囲いの底部を押さえた溝に火山灰が積もっていないことから、溝の上に構築物があったことを推定して、囲いがあったことを既に示して



第8図 囲い外部大型土器列図・盛土状遺構図・遺物出土状況図・粒状礫出土度数分布図

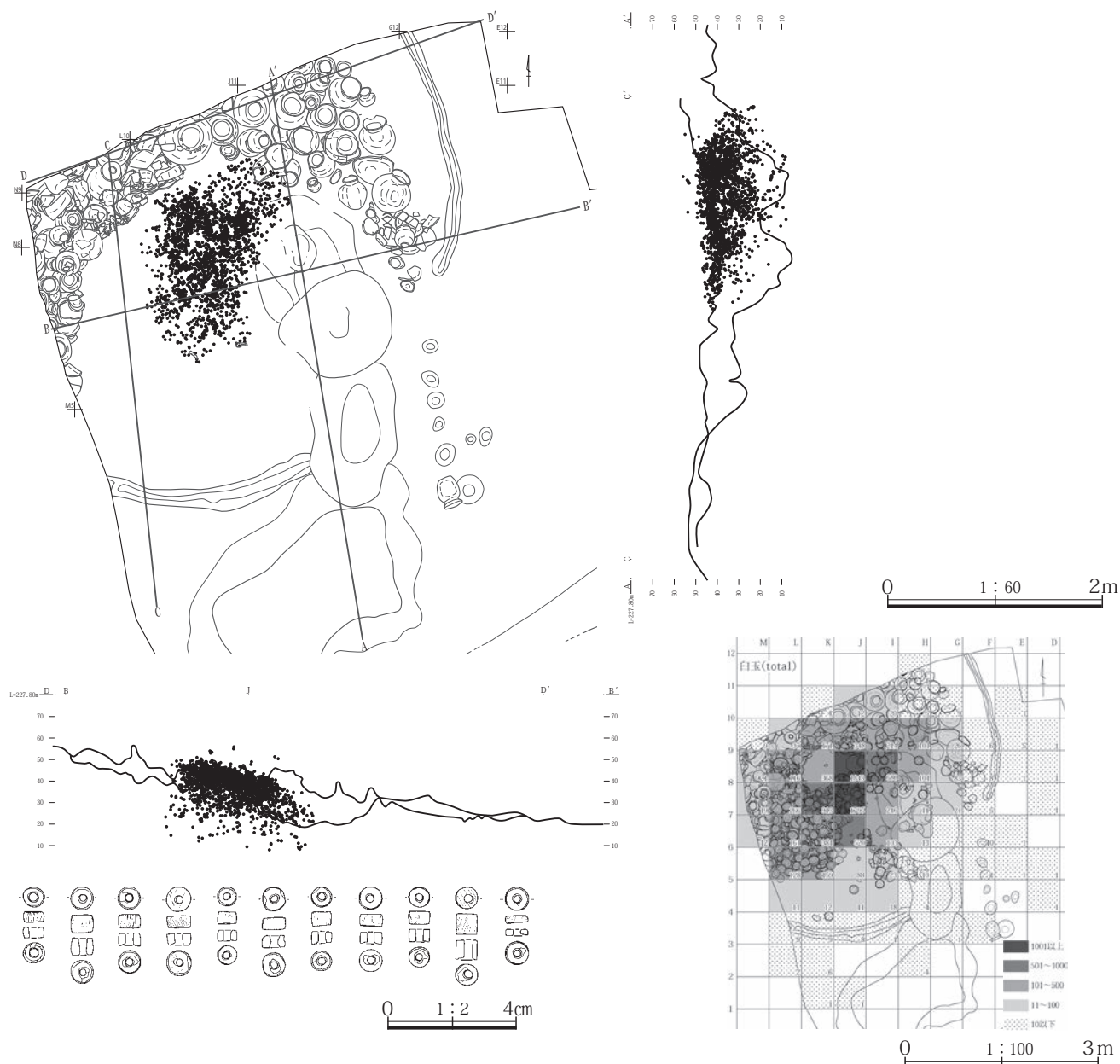




② 囲い前の大型土器群及び盛土遺構(第8図)

スコゲなどが無いのに対して、内面にススコゲが付着し、外面に火が焚かれた痕跡のある土器も置いてあることである(第8図・P181)。囲い内部の土器が火を使用しての行為を行った痕跡が無いのに対して、入口へ導入する大型甕には火にかけて使用したものが混じり土器の性格が異なることが分る。

また、大型土器配列が入口東側に南北直線状に配置されているのに対して、西側に長径2.5m、短辺1.5m、高さ10cmの不定楕円形状の盛土遺構がある。この遺構には、破碎された杯や碗以外に砥石や白玉がその上層部に置かれていた他に、特に盛土の東側からさらに東に位置する南北直線状配列の土器群近くまで、多量の径7～27mmの粒状礫が上層から出土している。これらの粒状礫は、自然の作用と考えられる円磨により光沢をもつものが多い。それら粒状礫が、囲いのなかからも少量出土



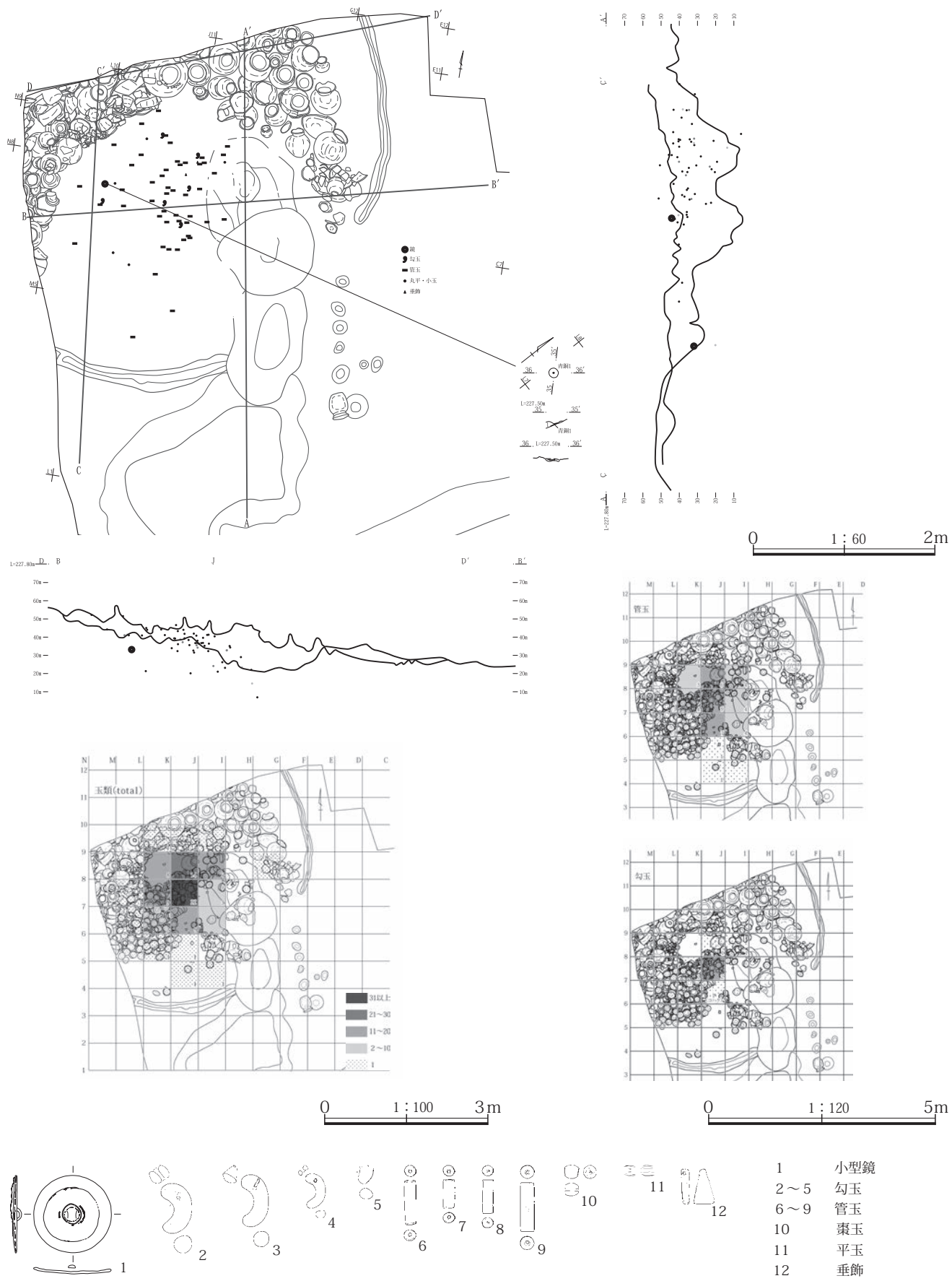
第10図 白玉集中部出土状況図・白玉図(土器内出土品を含む)・白玉全体出土度数分布図

するが、特に多いのは、盛土遺構東側であることは明瞭であり(第8図)、囲いに入る前の入り口部に集中して粒状礫を散布したことが想定される。白玉とは別の意味で、祭儀に使用される意味があったものと想定する。また、入口部付近の特に溝内部の囲いの下20cmの所から紡輪が出土している(第8図)。3号祭祀遺構での膨大な祭具の中で唯一出土した紡輪が入口付近の囲い下から出土していることは興味深い。

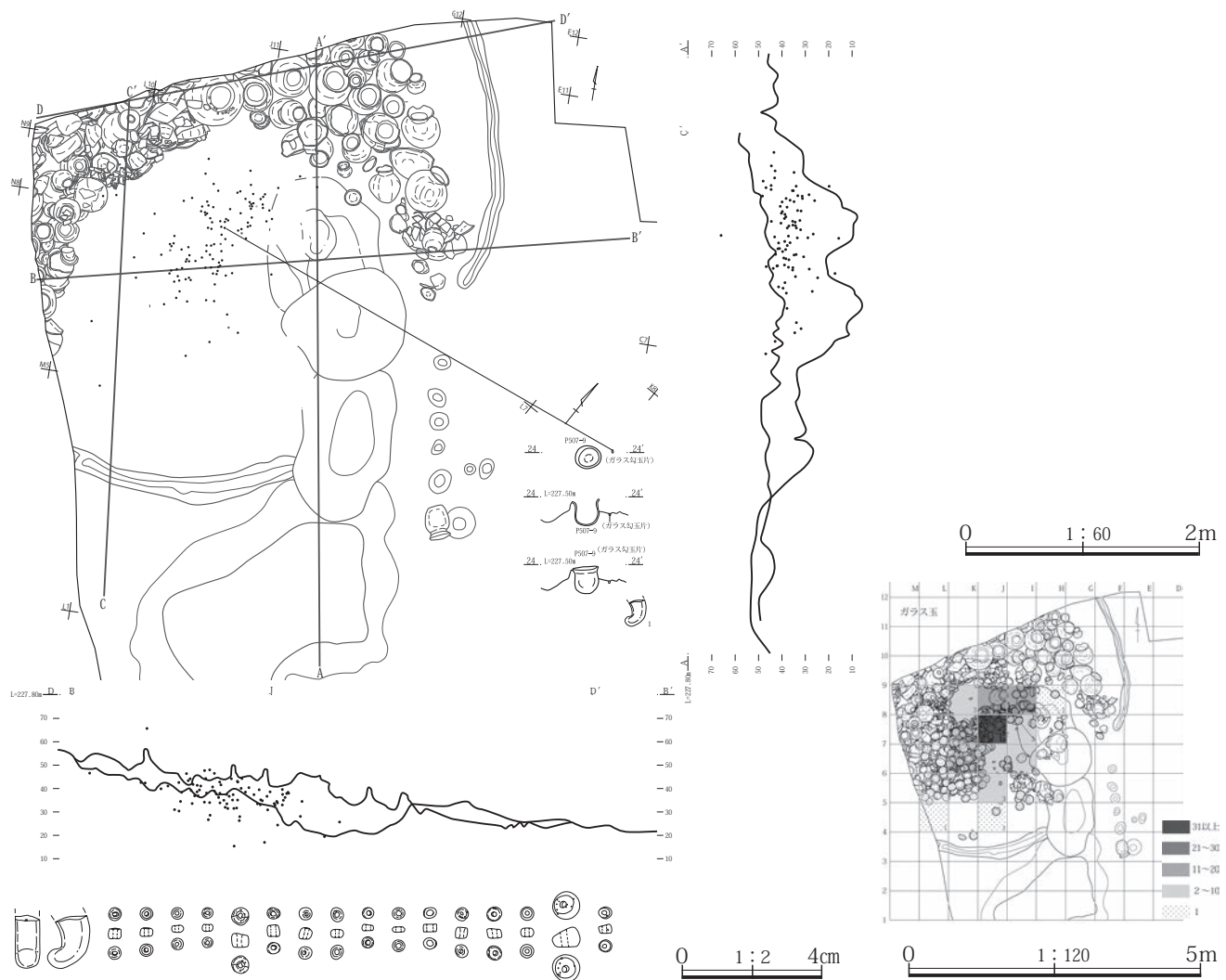
③ 大型土器配置(第9図)

大型土器が、祭具埋納部を囲むようにして置かれている(第9図)。祭具埋納部北側の東西方向に一直線に並ぶ中央大型土器群と、ウイング状に東西から南に延びる形態で大型土器を配置した東西の大型土器群である。

この配置で一番重要なことは、囲いの中心に位置する中央大型土器群に大型須恵器甕3点(P114・115-2・637、現地保存を含めると4点)が置かれていることである。当時、群馬においてもあまり個体数の多くない段階での大型須恵器甕の集積は、古墳の副葬品以外としては極めて稀である。3個の並列する須恵器甕の中で、P114大型須恵器甕は、当遺構及びそれ以外の遺構も含めて遺跡で最大の大きさを持つ須恵器甕であり、完形である。中心の須恵器甕(P637)は大きさでは東隣の甕より少し小さいが、意識的に破碎されている。西隣の須恵器甕(P115-1)やその須恵器甕上に載せてある大型甕(P115-1)なども口辺を欠いているものがあり、一部を欠くような行為をしている可能性が高い。土師器壺・甕



第11図 鏡と玉類出土状況図・玉類出土度数分布図・鏡と玉類図(土器内出土品を含む)



第12図 ガラス玉出土状況図・ガラス玉図(土器内出土品を含む)・ガラス玉出土度数分布図

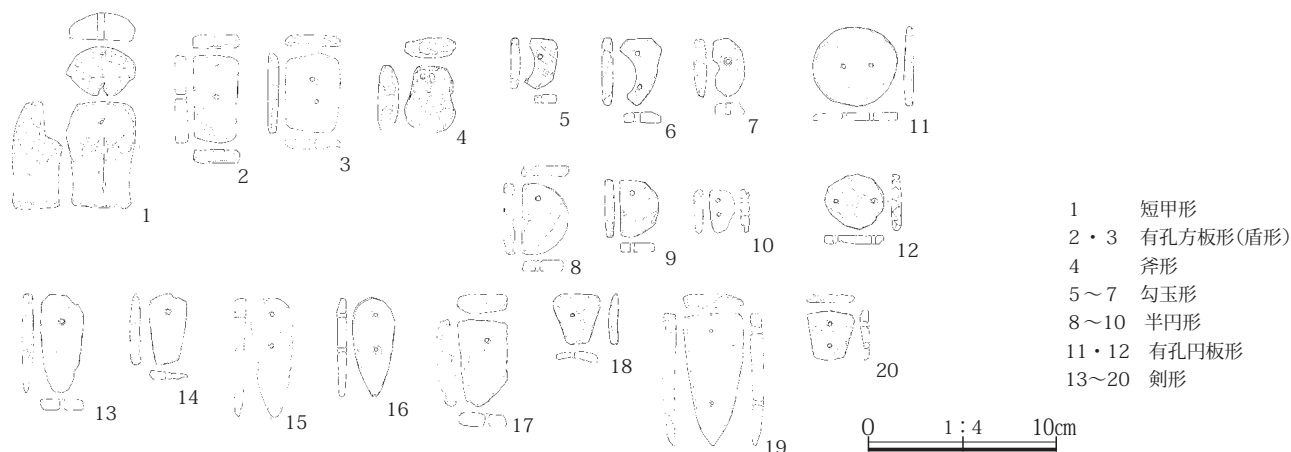
が完存しているものが多いことに比べて特徴的である。残念ながら中央大型土器群及び西側大型土器群は調査範囲の関係から全て調査できていない訳ではないので、それぞれの配置土器の構成の特徴は明らかにできないので、以下、全容が判明した東部大型土器群について説明する。東部大型土器群を見ると、大型土器の配置とその構成が良く分かる。全体で48点の土器組成は、須恵器甕が2、大型壺が18、大型甕が9、小型壺が2、小型甕が3、埴が2、甕が1、高杯が1、杯が10(杯A(内斜口縁杯)4、杯B(内湾口縁杯)2、杯C(須恵器模倣杯)1、杯D(以外の杯)1の構成)で、大型壺が38%、大型甕が19%で、基本的に大型土器壺・甕を中心にした(57%)配置であることが分る。それに少数の小型壺・甕と甕、埴、高杯と一部の重ね積みの杯群の組み合わせとなる。この後に杯を中心とする小型土器群を中央部に集積するが、それら小型土器群による飲食を行う際に、それらの土器に取り分ける前の液体などを納めていた祭具として使用した土器群と考えている。ほとんどが完形であるが、一部の

土器(P758)においては、頸から上の口辺が完全に分離しているものなどがあり、一部は故意に破碎しているものと想定している。東側大型土器群の中には、須恵器甕が2点(P436、P116)入っているが、中央大型土器群の須恵器大甕のような特別な扱いはなされていない。

④ 祭具埋納(第10～15図)

大型の土器群を配置した後に、大型土器配置の南側長径2m、短径1.5mの範囲で、J7・J8Gを中心にやはり祭儀で使用した祭具(鏡1・装身具161(石製玉類51(勾玉5・管玉42・棗玉1・平玉2・垂飾1)・琥珀製勾玉1・土玉1、ガラス玉108(勾玉1・小玉107)・白玉・石製模造品74(短甲1・勾玉6・半円形20・有孔円板2・有孔方板2・剣43)・鉄器135(鏃55・U字形鍬鋤先2・斧1・曲刃鎌4・穂摘具12・刀子17・錐1・針1・鉄器製作片(素材片)35、滓6)が土中から出土している。以下、それぞれの祭具の埋納状況と種類について簡単に述べる。

白玉(第10図) 白玉は、他の祭具と混じり膨大な数が第10図にあるように中央部(J7・J8G)を中心に埋納さ



第14図 石製模造品図(土器内出土品を含む)

の土中から出土しているのが特徴である。他に棗玉、平玉、小玉及び装身具としての垂飾なども出土している。**ガラス玉(第12図)** ガラス玉は土中からは総数108点出土しており、うちガラス勾玉片が1点あるが他はすべて小玉である。小玉は、鋳型法に比べ引き伸ばし法が全体の81%に達する。J7Gで特に集中して出土している。鋳型法は、色も紺・黄緑・淡青・青緑灰・青・濃青があり、紺が多くコバルト着色のソーダガラスSⅢBが主要な素材となる。引き伸ばし法は、ソーダガラスSⅡBが中心で、色味も淡青・黄緑・濃青・紺・赤褐・黄・暗灰色がある。多様な素材と多色を特徴とするのに対して、1号墳第主体部のガラス玉が鋳型法を中心とし、3号人骨の首飾りのガラス玉が青～紺色を中心とした色合いで、出土遺構の性格に応じてガラス玉の製造・素材・色が異なっている。**石製模造品(第13・14図)** 石製模造品は土中からは74点出土している。特に重要なのは短甲形石製模造品で、集中部すぐ北の須恵器P195の下から出土し、長頸鎌片と素材片の可能性の高い鉄器製作時の破片がすぐ近くから出土している。他に土中としては剣形が43点、勾玉形6点、半円形20点、有孔円板形2点、有孔方板形2点の構成である。集中するのはJ7Gからの出土で計23点出土している。深さは、地表面から20cmより上から出土している場合が多い。

鉄器(第15・16図) 鉄器は土中より総数135点が出土している。特に出土が多いのが、J8Gで、36点の出土を見る。他の祭具に比べて集中区がやや北にある。鎌が55点と圧倒的に多いのが特徴である。U字形鍬鋤先が2点出土している。利根川対岸の同一時期の祭祀遺構である宮田諏訪原遺跡では7点ものU字形鍬鋤先があり、当時の最新の開墾・農具であった鍬鋤先を祭具として埋納していることに意義がある。他に曲刃鎌4点、穂摘具が12点と数多く出土している。他に、袋柄斧が1点、鹿角装刀子が12点、木装刀子が1点、装具が不明な刀子が4点ある。他に錐1点、針1点がある^(註2)。

穂摘具の数が多いことも特徴である。群馬県内においては、古墳の副葬品や、竪穴建物などから出土するも極めて限られているが、この3号祭祀遺構では多量の穂摘具が出土しており、注目に値する。同じ穂摘具としては、利根川対岸にある宮田諏訪原遺跡や、富岡市の久保遺跡などで出土しており、祭祀遺構との関連で出土する例が多いことが指摘できる。祭具として祭儀の中で使用されることが多いものとして位置付けられる。

鉄器を製作する際に出る破片が数多く出土しており、素材として再利用するものと考えて素材片として紹介したものが34点ある。また、鉄滓が数点出土しており、当地で、鉄器の生産が行われたことを間接的に示すものである。

以上の鉄器全体に言えることは、まず祭祀遺構からの出土としては極めて数が多いことである。全国の遺跡例から見てもこれだけの数の鉄器を出土している遺跡は少ない。また、鉄器は実用具として使用できるものもあるが、小型化したもののほうが多く、祭儀に使用する祭具として製作・使用した可能性が高いものである。

⑤ 小型土器群集積(第17・18図)

コの字形の大型土器群配置後、土器群の南側、西側大型土器群に接するようにして杯・小型壺・高坏などを中心にした小型土器群が2～20段に積み上げられる形で集積されている。これら小型集積の総数は628点で、内訳は、杯528(杯A194、杯B117、杯C210、杯D7)、高杯21、小型甕28、小型壺7、椀4、埴3、須恵器9(高杯3、ハソウ3、小型壺2、台付小壺1)であり、圧倒的に杯が多い。このような土器の組成から見れば、これらの土器が飲食を伴う儀礼で使用された土器である可能性が高い。別の場所で儀礼を行った際に使用した液体の入れものである大型土器群をコ字形に配置した後に、実際に飲食に使用した小型土器を、コ字形配置の大型土器群の内側に積み上げる形で集積を行ったものと想定される。積み上げの順番であるが、大型土器の西側土器群の



第15図 鉄器出土状況図・垂直分布図・出土度数分布図

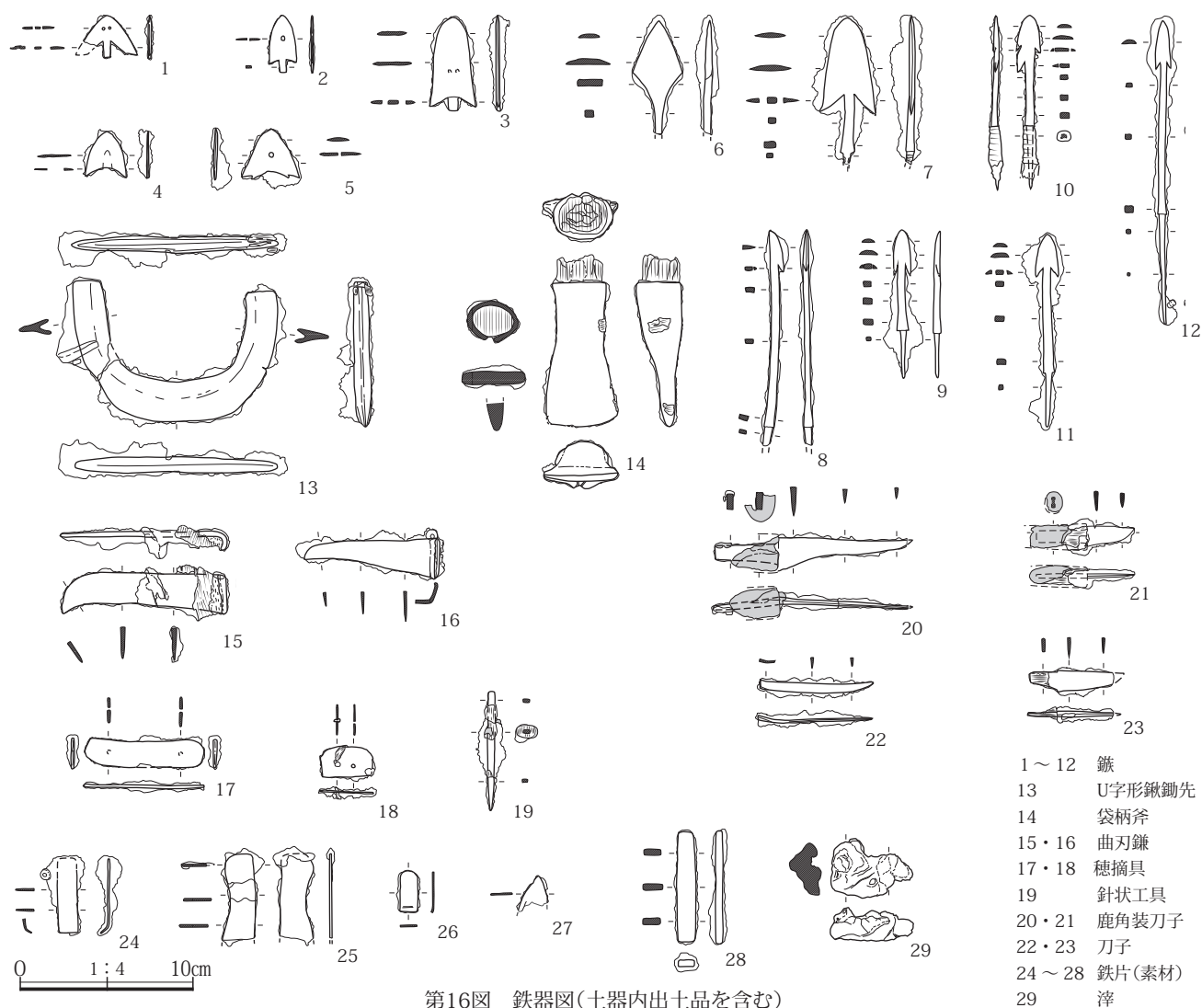
西北側から積み上げて西から東へと積み上げ、1列が終わると南側に移りまた西から東へと積み上げていったものと推定している。

中央大型土器群の須恵器甕群の特に、P115・P637の須恵器大甕の前には空間がある。祭具埋納では数点の埋納はなされているが、その埋納後に表面を土で覆った後には土器を置いていない。周りが土器を密集して置いているのと対照的である。この空間に、有機質の供え物を置いた有機質の台を置いていた可能性がある。ただし、有機質の供え物や台の痕跡は認められないので、あくまで推測である。

集積・積み上げの様子は、第17・18図に示した通りである。これを見ると、土師器杯3形態(杯A(内斜口縁杯)、杯B(内湾口縁杯)、杯C(須恵器模倣杯))が、特定の場所に集中することや、積み上げの際に意識して同一形態の杯をまとめることなどは行っておらず、ランダムに積み上げていっていることが分る。また、積み上げの

際に不安定になるのは分かっているのに、高杯を一番下に埋置することが3例行われている。また須恵器も5例中4例が最下段に置かれており、積み上げの際に、須恵器を一番下に意識して置いていることが分る。また、白玉を中心にした祭具を少数土器の中に入れているものがあるが、最下段の土器に多いことも指摘できる。

杯のみの積み上げは、高杯・小型壺・小型甕などが混じる積み上げに対して42%で半分以下である。このように飲食をする際に使用した土器群をあまり順序や形態



第16図 鉄器図(土器内出土品を含む)

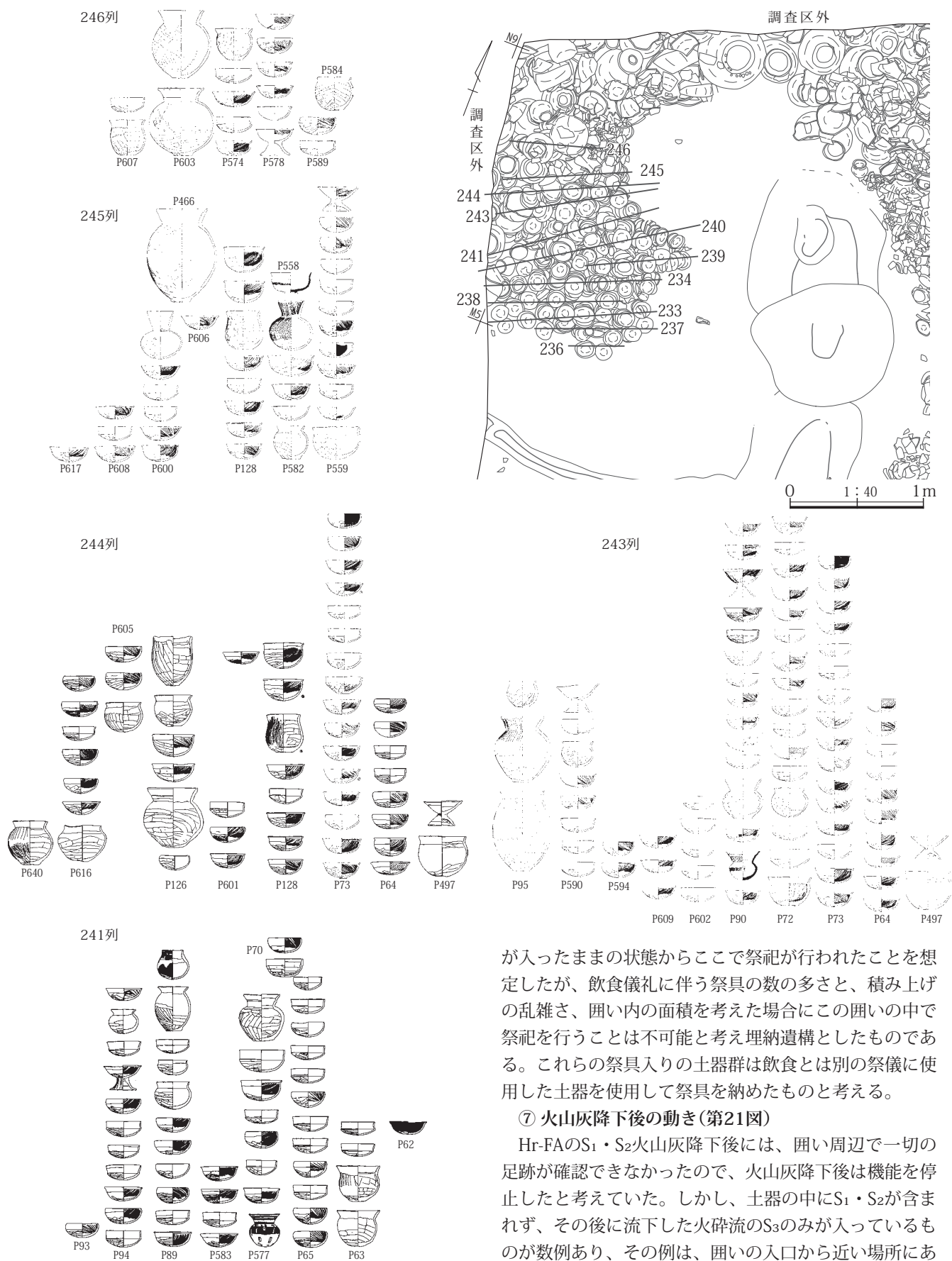
- 1～12 鎌
13 U字形鋤先
14 袋柄斧
15・16 曲刃鎌
17・18 穂摘具
19 針状工具
20・21 鹿角装刀子
22・23 刀子
24～28 鉄片(素材)
29 滓

にこだわらずに次々と積み上げていった様子が、立面図・断面図でのジグザク状に土器を置いていくようなことからうかがえる。

⑥ 祭具が入る小型土器の配置(第19・20図)

杯を中心とする小型土器の中に祭具が入ったものを1～2個単独あるいは重ね置きする形で配置された。中央の大型土器群のすぐ南側から置かれ、小型土器集積群の東側までの範囲のみに祭具入りの小型土器が置かれている。祭具を納めた例として89例ある。祭具には、白玉を基本として、玉類・ガラス玉・石製模造品・鉄器などを土器の中に納めたままで土器を配置するという行為である。白玉が2,993点、玉類が13点、石製模造品が75点、鉄器39点、ガラス玉30点の5種類の祭具が納められている。4種類の祭具を納めた白玉・石製模造品・鉄器・ガラス玉のセットが4例、白玉・玉類・石製模造品・鉄器のセットと白玉・玉類・鉄器・ガラス玉のセットが2例、白玉・玉類・石製模造品・ガラス玉のセットが1例ある。3種類の祭具を納めた白玉・玉類・石製模造品

のセットが5例、白玉・石製模造品・鉄器のセットと白玉・石製模造品・ガラス玉のセットが3例、白玉・鉄器・ガラス玉のセットと白玉・石製模造品・ガラス玉のセットが1例、2種類の祭具を納めた白玉・石製模造品が8例、白玉・玉類のセットと白玉・鉄器のセットが2例ある。1種類では石製模造品のみが1例、白玉のみが58例ある。これらのセットから見ると、白玉以外の祭具で、土器の中に納めることが多い祭具は、石製模造品と鉄器である。石製模造品の中で土器の中に納める率が多いのが、有孔円板と有孔方板である。有孔円板・有孔方板ともに全体の9割が土器中である。鉄器では、鎌・穂摘具・素材片が多い。特に穂摘具11点、鉄器製作破片(素材片)11点、鎌10点の出土を見ており、鉄器全体の中でそれぞれ25%ずつの比率である。土中に納められたものでもこの3種類の個数が多いが、土器中に納められる祭具においてもこの3種が多く使用されていることを示している。このような多様な祭具が主に杯を中心とした土器に納められている例もあまり無い。調査当初はこの祭具



第17図 小型土器積み重ね状況図(1)

が入ったままの状態からここで祭祀が行われたことを想定したが、飲食儀礼に伴う祭具の数の多さと、積み上げの乱雑さ、囲い内の面積を考えた場合にこの囲いの中で祭祀を行うことは不可能と考え埋納遺構としたものである。これらの祭具入りの土器群は飲食とは別の祭儀に使用した土器を使用して祭具を納めたものとする。

⑦ 火山灰降下後の動き(第21図)

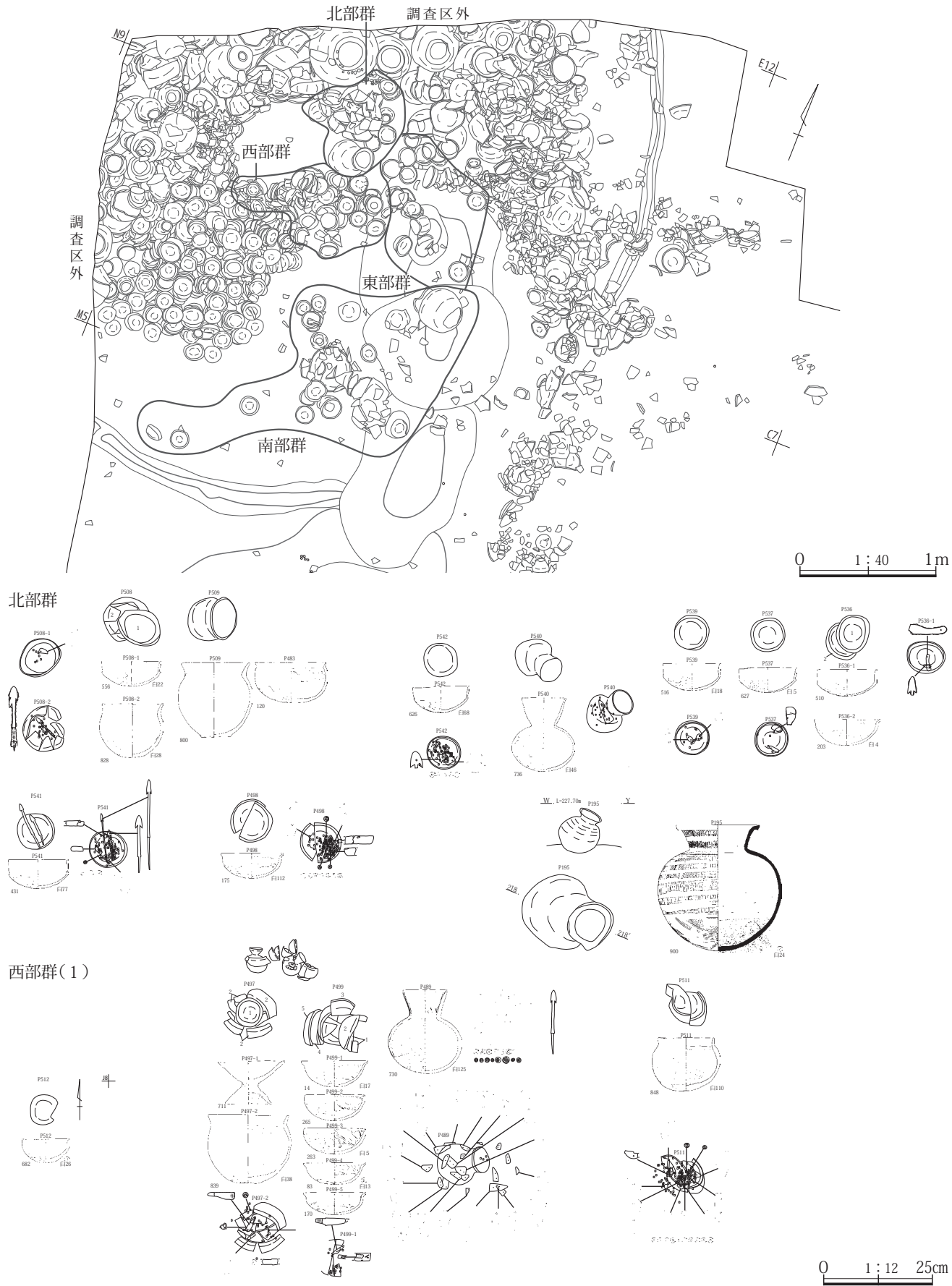
Hr-FAのS₁・S₂火山灰降下後には、囲い周辺で一切の足跡が確認できなかったため、火山灰降下後は機能を停止したと考えていた。しかし、土器の中にS₁・S₂が含まれず、その後に流下した火砕流のS₃のみが入っているものが数例あり、その例は、囲いの入口から近い場所であり、土器の設置や、鉄器の配置などを行っていることが

234列

Figure 1 displays a series of 15 diagrams illustrating the development of the human brain, labeled P40, P42, P45, P44, P47, P46, P83, P457, and P56. The diagrams are arranged in a staircase pattern, showing the progression of brain development over time. Each diagram is labeled with a number in the bottom right corner.

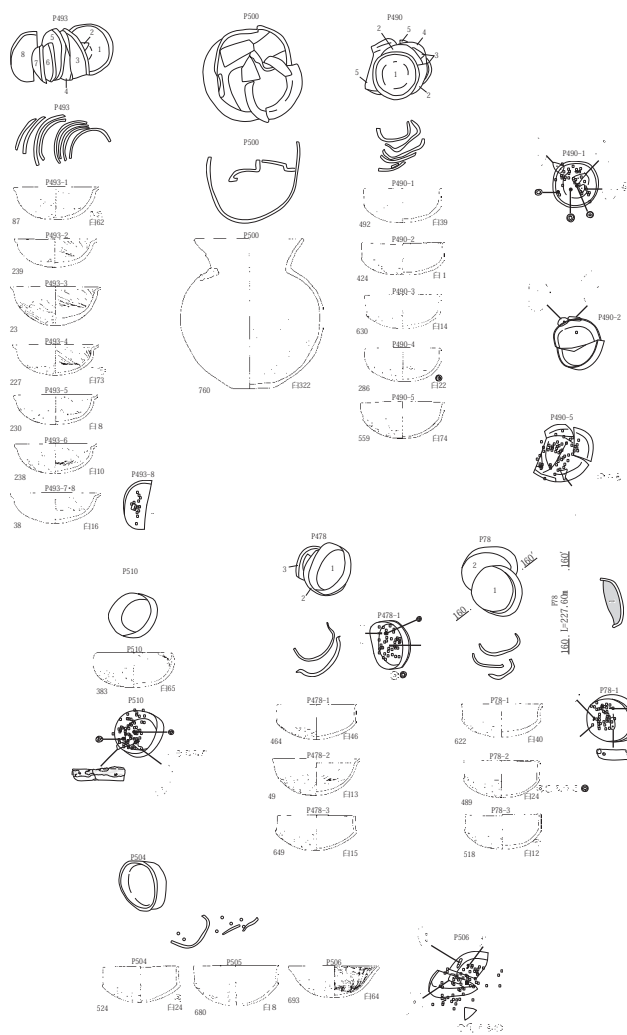
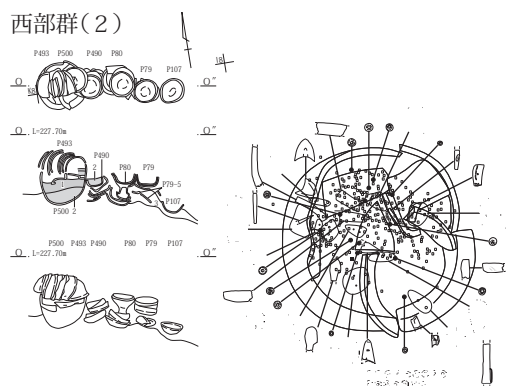
Figure 1 displays a 10x10 grid of pie charts, where each row represents a year from 1999 to 2008 and each column represents a category (P39, P41, P44, P46, P48, P55, P54, P134). The charts illustrate the distribution of 233 cases across these categories for each year. The distribution patterns vary significantly over time, with some categories showing a high concentration of cases in certain years (e.g., P48 in 1999) and others showing more varied distributions (e.g., P55 in 2008).

第18図 小型土器積み重ね状況図(2)

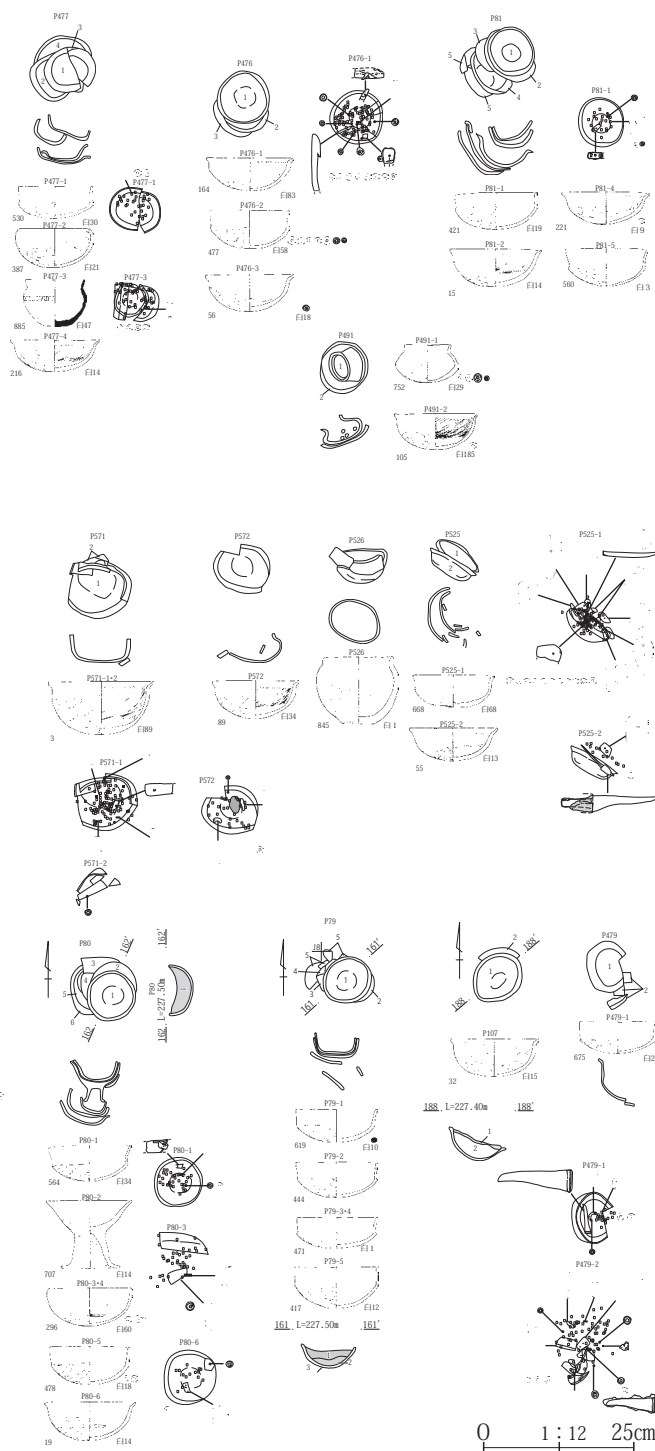


第19図 小型土器配置区分図、小型土器・祭具出土状況図(1)

西部群(2)



第20図 小型土器・祭具出土状況図(2)

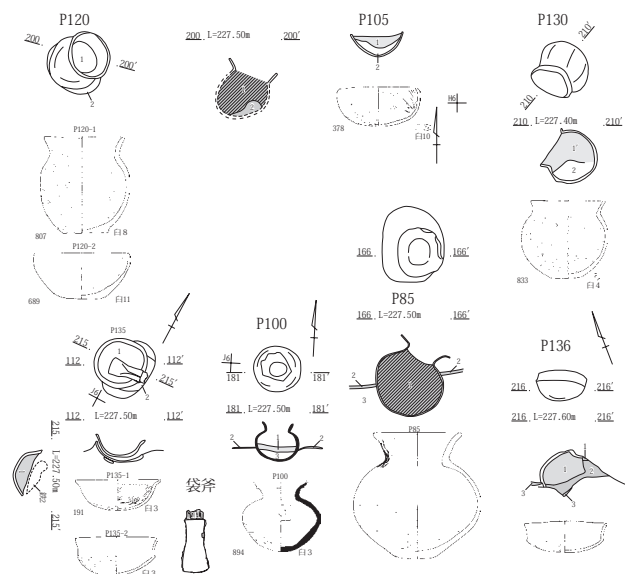
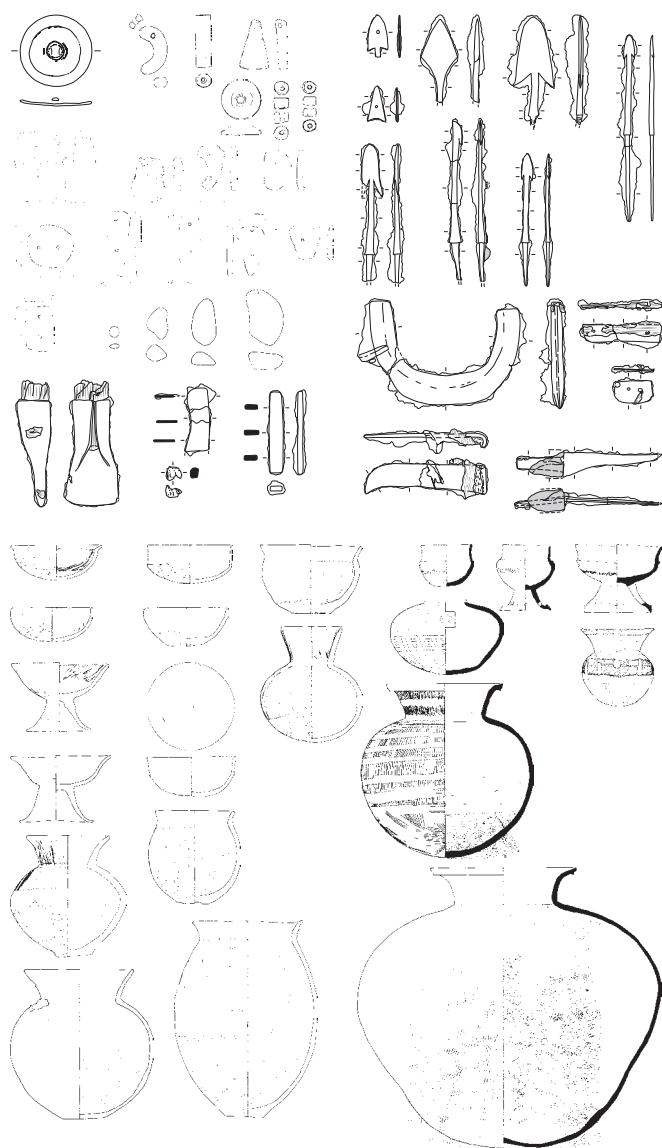
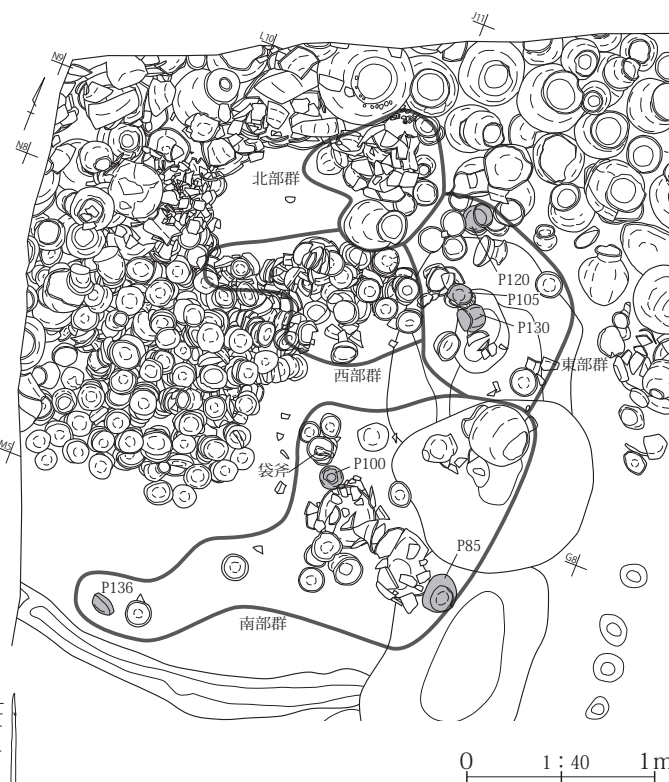


分かった。つまり、祭具埋納後、火山灰が降下した後も、極一部であるが、土器や鉄器を置くことを行っていることが分る。

4. 3号祭祀遺構の特徴(杯について)(第22図)

特徴的なのは、金井東裏遺跡3号祭祀遺構において、この時期に杯の中で最新の様相を示す杯C(須恵器模倣杯)が41%で一番多く、次に杯A(内斜口縁杯)が36%、杯B(内湾口縁杯)は21%で一番低い。報告書でも言及

したが、金井東裏遺跡より少し遡る、高崎市下芝天神遺跡第2群器物集積遺構では、杯Aが50%、杯Bが43%、杯Cは7%である。下芝天神遺跡では、杯Aが杯の構成比率の中で一番多く5割を占め、杯Bも4割を占めるのに対して、金井東裏遺跡では、杯Aが36%、杯Bに至っては21%と低い。反対に、杯Cは、金井東裏遺跡で41%と4割を超えるのに対して、下芝天神遺跡は1割未満である。明らかに金井東裏遺跡では、須恵器模倣杯

第21図 S₂降下後に置かれた土器群・斧と出土位置図

第22図 3号祭祀遺構祭具一式

が主体となっていることが比率から明らかである。下芝天神遺跡と近い組成を示すのが、Hr-FA降下直前という金井東裏遺跡3号祭祀遺構と同時期である宮田諏訪原遺跡1区1号祭祀遺構で、中心は杯A(42%)と杯B(52%)で、杯C(6%)は少ない。また、同じHr-FA降下直前の中筋遺跡1号竪穴建物からは杯Bのみが出土している。以上上げたことからすると、杯Cの多用は時期的な問題だけではなく、須恵器模倣杯という形態を選択使用していたのが金井東裏遺跡であることが分る。須恵器の技法を模倣して製作した土師器杯11点や土師器高坏2点が当遺跡から出土していることと併せて、新しい土師器の形を須恵器工人との交流の中で採用して製作使用していった姿が想定される。

おわりに 今回の検討により、3号祭祀遺構での祭具・土器の埋納・集積の様子を検討し改めて位置づけを行うことができた。しかし、他遺跡の祭祀遺構との検討がほとんど行えなかった。報告書の段階でも多少の検討を行っているが、今後の課題として、再度他の祭祀遺構との祭礼の目的も含めた比較検討を行う次第である。

註1 また、こちらのミスにより誤字や誤植も多くそれも併せて訂正して記述するものである。

註2 報告書で釘と紹介した鉄製品は、その後の検討の結果、鎌の茎の可能性が高く、釘は3号祭祀遺構から出土していないとの結論になった。

文献

杉山秀宏・大木紳一郎・宮下寛他 2019『金井東裏遺跡〈古墳時代編〉』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
参考にした遺跡の報告書は省略した。